

私は病院勤務医から、公衆衛生医師へ転身しました。3年間の保健所勤務でのさまざまな経験について振り返って書きたいと思います。

公衆衛生医師と
なってきたきっかけ

私は、学生時代に衛生学の教授と親しかったこともあり、環境保健分野のセミナーや実習に参加していました。循環型社会の実現や環境保全といった内容でしたが、生活習慣の見直しや健康維持にもつながる興味深い内容であったと記憶しています。そのほかにも、公衆衛生学の講義で医系技官の先生の話に興味をもちたり、保健センターでの実習で家庭訪問をしたりといった経験をしていました。卒業後の臨床研修では保健所実習の経験はありませんでしたが、病院で放射線科医として仕事をしていく中で、医療費の問題など社

会医学への興味は常々もっていましたが、

宮崎県へ

もともと、私は幼少時から中学までを宮崎市で過ごし、親も宮崎に住んでおり、縁あって宮崎県に入ったところ、縁あって宮崎県に入職しました。初任地は延岡でしたが、まったく住んだことはなく、旭化成の工場の煙突が印象的だったのを覚えています。また、延岡は「チキン南蛮」発祥の地で、おいしいチキン南蛮が食べられるので、南蛮党の私にはよい所でした。

保健所に勤務して最初の仕事は感染症担当でした。当時、管内で百日咳の集団感染が起こっており、

国立感染症研究所の実地疫学専門家養成コース(FETP)の先生方と一緒に仕事をさせていただくなど貴重な体験をさせていただきま

した。また、同時期に県内の養鶏場で鳥インフルエンザが同時に多発し、県内を北へ南へ飛び回る経験をしました。それに加え霧島連

峰の新燃岳の活動が活発化し、宮崎県には災難が降りかかり続けま

す。私の県庁勤務は、当初から立て続けに感染症危機管理を実地で学ぶ経験を得るといふ波乱のスタートとなりました。

しかし、そこで終わりではありませんでした。平成23年3月11日に発生した東日本大震災です。

私はあの日、夜の、医師会の研修に出たのですが、講師の先生が大津波警報の関係で来られなくなり、医師会の先生方と「これは大変なことになったな」と話をしていたのを覚えています。



宮崎県福祉保健部
健康増進課兼
小林保健所 主査
西田 敏秀

西田 敏秀

鹿児島県出身。平成19年熊本大学卒業。臨床研修を経て放射線科医として勤務後、23年1月宮崎県入庁。延岡保健所勤務を経て、26年4月より現職。

その後、福島県の放射線スクリーニングの支援に二度行くことになりました。放射線の知識が役に立つことがあるとは入庁前には想像もなかったことです。宮崎県では前年に口蹄疫の伝染病が発生しており、前述の鳥インフルエンザも併せて全国からさまざまな支援をいただきましたので、その恩返しの意味も含めて支援には力が入りました。福島の方々からは大変な中、「わざわざ九州からありがとう」とお声をいただいたときには、感動しました。

人とのつながりを大切に

宮崎県の公衆衛生医師の養成システムは、入庁後数年間で数々の研修に出してもらえるようになっており、私もこの3年間で多くの研修に出させていただきました。特に平成24年には、国立保健医療

科学院の3か月の長期研修に出させていただき、全国から集まった同志とともに学ぶ機会を得たことは、職場に同世代の医師がいな

地域の感染症
ネットワークの構築

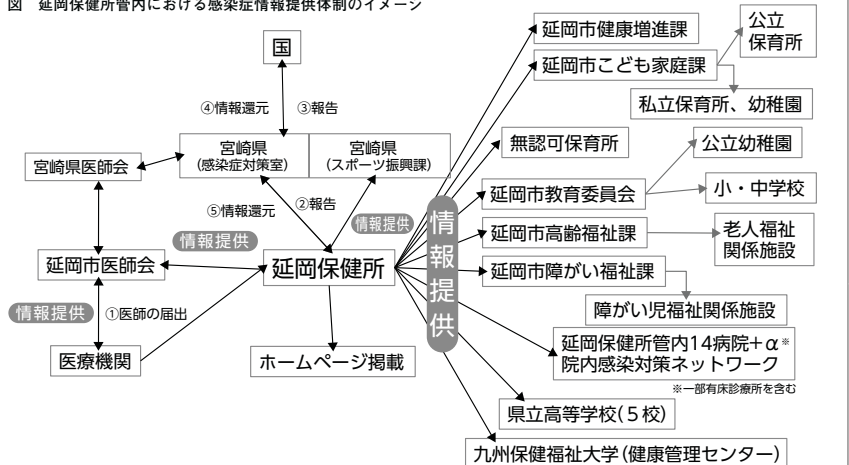
この3年間で取り組んだ主なものの、地域の感染症ネットワークの構築があります(図)。もともと延岡は県庁所在地の宮崎市から北へ約100km離れており、中央で開催される研修に出にくい環境でした。そこで、保健所が主体となって病院、高齢者施設、保育園等に感染症対策研修を行い、地域のレベル向上をめざしました。また、ブログ、FAX、メールを用いた感染症の情報提供を定期的

に行い、最新の情報が管内の関係機関に届くようにしています。平素からこのような関係を構築しておくことで、非常時の情報提供にも役立っています。今冬には管内で麻しん患者の発生がありました。そのときにも速やかな情報提供を行うことができ、幸いにして感染拡大することなく終息させることができました。

公衆衛生の魅力

改めて、公衆衛生の魅力は人とのつながり、ネットワークだと思います。一人ひとりの力は小さいけれども、みんなで協力することで大きな力となることを、さまざまな事例を通して感じています。また、社会の動きとともに日々いろいろな事例があり、改めて公衆衛生のフィールドの大きさを認識させられています。住民の生活、生命、生きる権利を「衛る」、公衆衛生医師として、今後も精進していきたいと思っています。

図 延岡保健所管内における感染症情報提供体制のイメージ



感染症週報：週1回 ホームページ掲載
 感染症情報：随時 ホームページ掲載+FAX+メール
 感染症対策ネットワークメール：月1回程度 管内14病院+α 院内感染担当者へメール